

	第 1 回 こ ど も 部 会 の 主 な 意 見	キーワード	具 体 策 （例）
① 小 中 学 校 に お け る 初 期 指 導 に つ い て	主に、①教員に日本語指導が必要な外国人のこどもに対応するノウハウがない ②言葉が通じない ③教材に関する情報不足 の3点が問題。	情報の収集・発信方法の工夫	○ 「外国人児童生徒日本語教育支援補助金」（複数の市町村を対象に活動する団体に対する送迎費等の補助制度。補助対象経費：運転手の費用、ガソリン代、会場使用料、バス等賃借料、運行委託料等）を活用し、散在地域の子も日本語教室に通いやすくする。
	一括した教材等の情報がない。		
	一人の語学相談員が複数校兼務することは可能だが、一方で集住校が手薄になるということが起こり得る。	散在地域の対策	○ 「日本語学習支援基金」を活用し、散在地域にも外国人のこどもの居場所となるような日本語教室を開設する。（「5人以上のこども」、「日本語教師有資格者1名以上」などの条件を満たした日本語教室は当該基金の助成制度を利用できる。）
	散在地域は特に情報・ネットワークがないため、仕組をつくりにくい。		
	豊橋市ではこどもの初期指導はボランティアの力を借りている部分大きい。	学校とNPOとのコラボ	○ 語学ボランティアのさらなる活用。 〔参考〕 「あいち医療通訳システム」（事務局：多文化共生推進室）による医療通訳の派遣
	母語話者と日本語指導ができる者とでチームを組んで、必要なときに学校で支援できるのが理想的（教員+日本語指導員+語学堪能者）。		
	集住地域では、比較的NPOと学校とのコラボレーションが進んでいる。		
	学校現場の先生と地域のボランティアがつながる機会がまだ少ない。学校現場とボランティアが上手く連携できる方法を考える。		
	学校の空教室を使用してプレクラスを実施する手法があるかもしれない。		
	予算や人材養成の点から、既存の県の語学相談員とは別の支援チームを編成して指導にあたることは困難。	その他	
	加配教員の増員や、語学堪能者の教員採用には限界がある。		
	「特別な教育課程」を編成するためにはDLA（※1）が重要。		
	ものづくりの愛知において、外国人のこどもも「ひとつくり」の一環として見るべき。		
	語学力よりも簡単な日本語で分かってもらえるような指導力が重要。		
② 就 職 支 援 に つ い て	日本人も含めて就職を希望する中学生自体が少数派。	工業・定時制高校への進学拡大	○ 進路ガイダンスやシンポジウムにおいて先輩から”成功事例”を紹介するなど、小中学生の段階から、社会で活躍している先輩の話を聞く機会を設け、長期的に「日本語を習得して高校に進学し、将来の選択肢を広げる」ことにつなげていく。（NIC、豊橋市）  ○ 日本語習得のインセンティブを与えるため、外国人高校生を対象としたスピーチコンテストを開催する。  ○ 外国人児童生徒の企業見学や職場体験を実施する。
	長期的に見て、むしろ「高校に進学して選択肢を広げることが有意義ではないか」ということを地道に伝えていく。		
	工業高校に入学できるこどもを育成し、卒業したこどもを採用する仕組をつくる。		
	工業・定時制を含めて外国人生徒の受入拡大を検討する。		
	学校をドロップアウトしてしまったこどもに対して、基本的には「学び直し」をし、再スタートできるよう支援している。	その他	○ ものづくりに興味と関心を持ってもらえるよう、外国人の子ども向けの「発明クラブ」を開設する。
	高校卒業、日本語能力の向上、資格取得など、将来に活かせるステップアップがあるとよい。		
外国人青年たちの体験談を発表するような啓発イベントへの来場者の裾野が広がらない。			
③ プ レ ス ク ー ル に つ い て	乳幼児・就学時健康診断においてプレスクールのちらしを配布している。	外国人のこどもの親へのアプローチの工夫	○ プレスクールの開催場所、開催時間、託児所併設などの検討。  ○ プレスクールに参加したくなる工夫をする（イベントの同時開催、相談会の併設、参加賞の贈呈など）。  ○ 市町村窓口、学校、自治会、外国人コミュニティ、団地管理者等に広報の支援を要請する。  ○ こどもの学校行事に親子での参加を促進するなど、日本人との交流の場を設け、母語社会以外のつながりをつくる。  〔参考〕 平成28年度「子育て外国人の日本語習得モデル事業」
	不就園児や「教育意識の高くない親」、「地域に出て来ない親」へのアプローチが問題。		
	保育園・幼稚園からの引き渡しは保護者が行わなければならないため、時間的制約の少ない不就労・短時間パートなどの親でないとプレスクールに通えない。		
	外国人コミュニティを活用して、対象となるこどもを発掘するのが有意義。		

※1 DLA ＝ Dialogic Language Assessment（外国人児童生徒のためのJSL（※2）対話型アセスメント）

※2 JSL ＝ Japanese as aSecond Language （第二言語としての日本語）